

小黒康正著 NHK 100分de名著 『トーマス・マン 魔 の山』

福元, 圭太
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7405141>

出版情報：九州ドイツ文学. 39, pp.67-71, 2025-12-26. VEREIN FÜR GERMANISTIK-KYUSHU
バージョン：
権利関係：



小黒康正著 NHK 100分 de 名著 『トーマス・マン 魔の山』

福 元 圭 太

37年前から友人、28年前から同僚。小黒康正氏による著作の書評である。年来の知己朋友ゆえ、ある程度の「楽屋落ち」はご寛恕願いたい。しかもいきなり私事から入る。

妻が『魔の山』を読み始めた。付箋メモによれば「読み始め2022年4月4日」。ダヴォースもかくや、コロナ逼塞中である。曲がりなりにもトーマス・マン研究者である夫が熟読しているマンの代表作を読んでみよう、結婚27年目にして夫の精神的内実を理解しよう——ということではまったくなく、マンは「睡眠導入剤」である由。私なら眠れなくなる『ブッデンブロック家の人々』でも、妻は10ページ読めば入眠していた。『魔の山』は、計算すると、入眠まで5頁弱である。なにせ議論が多い。話の展開が遅い。難解で錯綜している。いつまでも終わりそうにない。夏になっても読んでいますので「今どこ」と聞くと、まだ上巻。「まだ読んでるの」、「下巻に入ったよ」。件の付箋によれば、「2022年8月2日、上巻読了」。同日下巻に取りかかり、「2023年1月26日、下巻読了」。「まさか7年はかかるまい」とは『魔の山』の語り手の科白だが、それでも10か月弱。ことほど左様に『魔の山』は長い。いや、「高く険しい」というべきか。

小黒康正氏によるNHK 100分 de 名著『トーマス・マン 魔の山』は、2024年5月に4回に亘って放送されたNHK Eテレ番組のテキストである。もう少し早く放送されていたら、妻も『魔の山』を「睡眠導入剤」として服用しなかったであろう。『魔の山』は「目が覚める」作品であることが、一目瞭然となったからである。

小黒氏が世界文学の「最高峰」と呼ぶ『魔の山』の、登頂ルートの一つを提示する。これがNHKからの要請であった。「中学生にも分かるように」という注文であつたらしい。『トーニオ・クレーガー』ならともかく……小黒氏は逡巡した。『魔の山』を噛み砕いて、たった4回で、というのは相当な難問である。しかも、まさに今『魔の山』を読む意義を打ち出してほしいというのが、EテレのEテレである所以である。小黒氏はこれに、『魔の山』が複雑な現実を、複雑なものとして、矛盾を含むものとして、リアルに提示していること、そして『魔の山』で繰り上げられるイデオロギーの対立そのものや、それに伴う戦争や紛争が現在実際に起きているということが、今『魔の山』を読む意義である、と答えているように思う。それかあらぬか、最終回（第4回）の放送日である2024年5月27日には北朝鮮のミサイル発射によるJアラートが鳴り、放送が中断されたのであった。

論文や著書とは異なるこのテキストの成立は、ご本人にうかがったところ、以下の経緯を辿る。まずNHKにこの話を持ち込んだのは、芥川賞作家で小黒氏と親交の深い平野啓一郎氏。その後、小黒氏の論文や著作を周到に読み込んできたNHK番組スタッフ（NHK

エデュケーショナル、NHK 出版、テレコムスタッフなど）の面々5名が、九州大学独文研究室を訪ね、半日をかけて小黒氏に取材（2024年1月13日）。その時のメモに基づきテキストの原案が提出され、小黒氏自身がそれを修正。NHK 番組スタッフのインタビューは長時間に亘り、微に入り細に入るものだったが、小黒氏はそれを「至福の時間」と形容する。テキストはつまり、言わば小黒氏の「語り下ろし」であり、論文とは異なる氏の魅力が十分に発揮されている。氏の語りの名調子にしばしば接してきた私には、表情や手の動きまで目に見え、語りの「間」の息遣いまで感じられる。

テキストは「はじめに」と第1回放送から第4回放送までのテキスト、そして附録「もう一冊の名著」としての『トーニオ・クレーガー』紹介から成る。

第1回「『魔の山』とは何か」で小黒氏は、マンの伝記や代表作に触れたのち、『魔の山』執筆開始に至るまでの経緯や背景をコンパクトにまとめる。重視されるのはもちろん、第一次世界大戦の勃発とマンの政治的転向。これが『魔の山』を複雑なものにした。「第一次世界大戦前の時代設定にもかかわらず、戦中にマンが示したドイツ帝国擁護の姿勢と、戦後のヴァイマル共和国支持をめぐる状況が、ともに反映」されたことが、『魔の山』の「複雑さの一因」（14）とされる。物語第1章と第2章を紹介する第1回テキストが活写するのは、いとこを見舞いに來ただけの主人公ハンスが——もとより死に対する親近感を持つてはいたのだが——「上」の世界で時間感覚を失い、「魔の山」の虜囚となっていく様。国際結核療養所「ベルクホーフ」を小黒氏は、病と死が蔓延する「デカダンスの時空」（27）、「十九世紀末から第一次世界大戦前のヨーロッパ社会の行き詰まり」（23）と喝破する。

第2回「二つの極のはざまで」は物語第3章から第5章まで。文庫本ではここまでが「上巻」。「魔の山」に棲まう一癖も二癖もある面々——風変わりな患者たち、医師ベーレンス「顧問官」、怪しげな黒衣の精神分析医クロコフスキー、「進歩と啓蒙」を説く人文主義者セデムブリーニ、そして水銀柱の計測値以上にハンスが「熱を上げる」、猫のようにまつろわぬロシア人女性ショーシャ夫人など——が登場する。「魔の山」は「道徳的、精神的、感覚的な冒険への能力を与える高揚」（47）が経験され、男女「両性具有のイメージ」（48）が充溢する錬金術的空間であった。ハンスは生と死、健康と病氣、理性とエロス、男と女、ヨーロッパなる「西」とロシア・アジアなる「東」という、「二つの極」に引き裂かれる。まったくドイツの形姿としてのハンスは、それら「二つの極」の「中間」で、大いなる「陣地取り」に翻弄される。やがてハンスは立派な肺浸潤患者として「魔の山」の住人に。かくして「人生の厄介息子」（ein Sorgenkind des Lebens）ハンスの「誘惑物語」はここに極まる。

第3回「死への共感」。物語第6章で「誘惑物語」は、にわかに「ハンス・カストルプとヨーアヒム・ツィームセンの物語」（58）へと変貌する。第6章・第7章は極端に分量が多い。この2章だけで文庫本「下巻」を成す。やおら登場するのはセデムブリーニの論敵、レオ・ナフタ。両者の対立を小黒氏は端的に「市民的な世界共和国」と「教会のコスモポリタニズム」（63）の対立と捉える。ナフタのラディカリテートは、中世キリスト教的共同体と共産主義革命によって神の国を実現するためには、独裁とテロを排除しない。この対立は「現在の私たちが置かれている状況によく似ている」（63）と氏は語る。「一方に欧

米を中心とした法の支配を主張する勢力があり、他方に、神や権力者の力の実現のためなら多少の犠牲はいとわなとする勢力がある」(63以下)。この一節がテレビで語られた2024年5月は、まだそうであった。しかし2025年1月のトランプ大統領就任後、もはや米国が「法の支配を主張」しているとは言い難い。我々が「平地」は今や「上」の「魔の山」より危ない。

兄ハインリヒと和解したのち、弟トーマス・マンは理性と啓蒙への共感を隠さない。一方第一次世界大戦前のマン自身の保守的理念のなごしかはナフタが担った。セデムブリーニとナフタの議論は、第一次世界大戦を経験したマンの政治的立場の変化、いわゆる「転身の構図」を自己批判的にトレースするものであった。「ナフタの登場さえ、物語の構想当初は考えていなかったと思われ」(65)と小黒氏が言う所以である。いとこヨーアヒムの意味付けも物語前半のそれから変化する。軍人ヨーアヒムは「魔の山」を「脱走」(66)し、第一次世界大戦に参戦して、病を悪化させ、ベルクホーフに戻る。そしてある晩、あっさりと息を引き取るのである。軍人ヨーアヒムの死の意味は第4回テキストで解説されることになる。

物語第6章には、成句で言えば「堅いクルミ」、言わずと知れた「雪」の章がある。「人間は善意と愛のために思考に対する支配権を死に譲ってはならない」。例の「死への共感」から「生への奉仕」なのか。半死半生の夢の中でこの理念を得たはずのハンスは、それをあっさり忘れてしまう。「雪」の章で物語が閉じないことを、マン自身も「構造的欠陥」と呼び、読者を翻弄する。なぜ第7章が必要だったのか。小黒氏はこの謎を、「[生に寄せる関心]が実際に加わる過程が描かれなければ」(74)ならなかったからであり、だから第7章では、ハンスが「雪」の章の「理念を再び想起し、実際にそれを生きる過程が描かれることになる」(74)のだ、と解く。

第4回「生への奉仕へ」。ところがこれを描くはずの物語第7章は「とてつもない下降線」(77)をたどる。単調な反復のみの生活の中で、ハンスの時間感覚は擦り切れる。そこに登場するのが「黙示録的」な「人物」(Persönlichkeit)、ペーペルコルン。「受難の人であるイエス・キリストと、踊り狂う異教の司祭ディオニュソスの姿」(83)の二重写しであり、「生」を体現するこの人物を読み解く小黒氏の筆は冴えわたる。黙示録は氏が年来、自家薬籠中とする領域である。第2回テキストでハンスに「単純素朴な人物」、「中間の国ドイツ」(55)の典型を見た氏は、更にハンスにイエスの愛弟子「使徒ヨハネ」と『黙示録』の著者とされる「パトモスのヨハネ」を透視する。二重どころか四重のハンスである。黙示録の数字「7」への注目も氏の真骨頂である。まさに第7章で思弁されるシューベルト「菩提樹」の意味、軍人ヨーアヒムを冥界から召喚する交霊会で、ハンスが「すまない」(»Verzeih!«)と謝罪する真意も解説される。氏の言わんとするところを煮詰めれば、「1914年の精神」へのマンの自己批判と追悼、となるであろうか。

物語の「青天の霹靂」は、第一次世界大戦の勃発。「生への奉仕」を忘れていたハンスは「菩提樹」を口ずさみながら、「心に秘めた愛と未来の新しい言葉のため」(97)に、死地へ赴く。その時ハンス30歳。キリストとツァラトゥストラ、小黒氏にとってはインゲボル

ク・バッハマンにおいても運命の年、30歳である。世界を覆う死の祝祭、熱病のような劫火の中からも「いつか愛が立ち現れるのであろうか」。物語の最後の一文に小黑氏は「没落が反転して上昇に向かう」(100) 示唆を、「ある種のユートピア志向」を見る。我々も祈らざるを得ない。ウクライナやガザの劫火の中から「いつか愛が立ち現れるのであろうか」。

E テレ・テキストの性格上、逐次言及されないが、ここには、小黑氏自身のものを含め、これまでの「魔の山研究」のエッセンスが凝縮されている。平成元年から36年に亘って我々は、多くの仲間と「九州トーマス・マン研究会」を続けてきた。『魔の山』について幾度熱い議論をたたかわせただろう。Hermann Weigand の古典的研究 (1933年)、Erich Heller のイロニー研究 (1959年)。とりわけ Gunter Reiss のアレゴリー研究 (1970年) は小黑氏にとって重要であった。Eckhart Heftrich の疑似教養小説論 (1975年)、Helmut Koopmann の知的小説論 (1980年) といった大御所、ショーペンハウアー哲学に基づく Børge Kristiansen の反教養小説論 (1985年) など外せない。研究の画期をなしたのは、死後20年経った1975年に封印が解かれたマンの日記の公開である。爾来、日記を駆使した小説の成立過程や背景の研究が進んだ。にわかにクローズアップされたのが、トーマス・マンと同性愛の問題である。Karl Werner Böhm や Claus Sommerhage の名を挙げておこう。日記という新資料をもとに時代とマンの関係を周到に論じた Hans Wißkirchen の決定打 *Zeitgeschichte im Roman* が出たのは1986年であった。「マン研究会」ではこの本を輪読形式で具に読んだ。現在 Buddenbrookhaus の館長である Wißkirchen を小黑氏が日本に招待した際、当時研究会で使ったレジメを献呈した。氏の驚きと喜びは相当なものであった。

日本の『魔の山』研究も層が厚い。敬称は略す。阪大の片山良展が「時の小説」として解説した博士論文 (1974年) が本格的な『魔の山』研究の嚆矢である。もう一人の西の雄、京大の山口知三はこれを「時代の小説」と読み替えた (1989年)。Zeitroman の二つ目の意味である。特に山口は、先述した「転身の構図」を作品解説の中で鮮やかに提示し、我々は「そうだったのか」と、しばし茫然としたものであった。目立たない小論ながら『魔の山』研究史で決定的に重要なのは、山本佳樹の研究 (1990年) である。山本は、第6章と第7章の奇妙な並行関係をまさに「発見」しながら、第7章の存在意義を問うた。そして2001年には小黑氏の黙示録小説としての『魔の山』研究が出る。また田村和彦は『魔法の山に登る』(2002年) で、小黑氏よりも先んじてこの高山への登頂ルートを示した。田村は小説における同性愛的な要素を解説し、大方を唸らせた。さらに早逝した友田和秀は、恩師山口の研究を参照しつつ、小説を取り巻く政治状況を分析 (2004年)。その後も『魔の山』関連の文献は陸続として絶えない。

小黑氏のテキストはつまり、『魔の山』研究のひとつの到達点を「中学生にも分かるように」示したものである。噛み砕いて説かれているが、その内容は専門の研究者にとっても、今後のマン研究の基準点となるべきものである。基準点と言うのは、まだ読まれていない魅力があるはずだからである。なにせ Zauberberg である。Zauber とは何か。

これもすでに議論となった。小黑氏が主催した日本独文学会全国学会シンポジウム「トー

マス・マン『魔の山』の「内」と「外」—新たな解釈の試み」には小黒氏以外に田村和彦、柏木貴久子、友田和秀が登壇した。2005年10月、同志社大学である。司会は私。会場から「提案」があった。下程息は言った。『魔の山』はやめて『魔法の山』にしてはどうか。すでに『魔法の山に登る』を書いていた田村は苦笑いし、他の面々は「ウム」と唸った。司会が何とかしなくてはならない。「様々な解釈がございましてしょうが……」とかなんとか言って逃げた。Zauber とは何か。魔か魔法か。その後私は瞠目すべき訳を発見した。『世界現狀大観』（新潮社出版）昭和五年、第2巻 獨逸共和國篇、423頁。昭和5年は1930年である。そのまさに直前の1929年に「ノobel文學賞」をトオマス・マンが受賞したことを伝える記事。周知のように対象は『ブッデンブローック家の人々』であったが、1924年のZauberberg も紹介されている。「彼の最大傑作であると稱せられる長篇小説『魅力の山』」。前年から始まった世界恐慌が日本にも及び、満州事変を翌年に控えたきな臭い時代である。『魅力の山』とはこれいかに。誤訳なのか、あるいは巧まざる名訳なのか。こう訳したのは圓地與四松（1895-1972）。東京日日新聞調査課勤務、ベルリン特派員。ツェッペリン飛行船の報道で知られる。まさに昭和5年に上田萬年の娘と結婚した。妻となった人は他ならぬ作家圓地文子である。デカダンスの魑魅魍魎が跋扈する「魔の山」か、時間の感覚を忘れさせる錬金術的「魔法の山」か、汲めども尽きぬ「魅力の山」か。これは読者にご判断いただくしかない。

附録「もう一冊の名著」として掲載された『トーニオ・クレーガー』紹介も、小黒氏ならではの文章。「魔の山」に「西」と「東」の軸があるとすれば、こちらは「北」と「南」。小樽の商家の跡取り息子である氏が南の博多に来て文学研究——リザヴェータなら「道に迷った市民」と片付けてしまうだろうと、氏は諧謔を飛ばす。いや片付けられなどしない。周知のように氏は2025年6月、『トーニオ・クレーガー』の17番目の邦訳者として、岩波文庫から新訳を上梓した。原文にできるだけ近づける、これまでの翻訳で十分には反映されていなかった体験話法に配慮する、というのが氏の方針であった。平野啓一郎氏が帯文を書いた。「本書が存在しなければ克服され得なかった孤独が、どれほど存在したことか！」すぐれた作家の言葉は、ことの本质をずばりと突き、強く刺さる。平野氏も小黒氏も私も、またその他あまたの人々も、この本がなければあの孤独を克服できなかったのだ。小黒訳のトーニオもまた、これから多くの孤独に手を差し伸べるであろう。

冒頭に戻る。『魔の山』読了後、妻は続けてマンを読むという。選んだのはまさに『選ばれし人』。なかなか渋い。「睡眠導入剤」としての効果は、『魔の山』を凌駕していたようだ。

(NHK 出版、2024年)